

名勝 清風荘庭園

2009年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

名勝 清風莊庭園

2009年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるかなむかしの、貴重な文化財も今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、庭園整備に伴う名勝 清風荘庭園の調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援たまわりました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

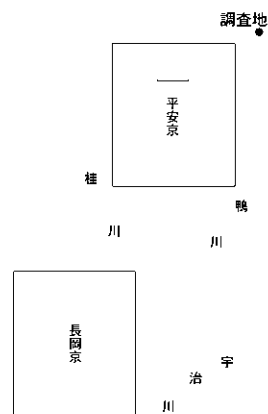
平成 21 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 名勝 清風荘庭園
- 2 調査所在地 京都市左京区田中関田町
- 3 委 託 者 国立大学法人 京都大学
- 4 調査期間 2009年2月26日～2009年3月31日
- 5 調査面積 84.0 m²
- 6 調査担当者 田中利津子
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「相国寺」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 12 本書作成 田中利津子
- 13 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	4
(1) 歴史的環境と立地	4
(2) 既往の調査	4
3. 遺 構	5
4. 遺 物	14
(1) 遺物の概要	14
(2) 出土遺物	14
5. ま と め	16

図 版 目 次

図版1	遺構	1	1区全景（北西から）
		2	2-1区全景（南から）
		3	2-1区全景（南西から）
		4	2-2区全景（東から）
図版2	遺構	1	3区全景（南から）
		2	4区全景（北西から）
		3	5区全景（北西から）
図版3	遺構	1	6区南半全景（北西から）
		2	6区北半全景（南東から）
		3	7区全景（北東から）
図版4	遺構	1	8区魚溜り2面底検出状況（北東から）
		2	8区魚溜り縦板検出状況（南東から）
図版5	遺物		出土遺物

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：800）	2
図3	2区調査前全景（南東から）	3
図4	5区調査前全景（南西から）	3
図5	2区作業風景（南東から）	3
図6	6区埋戻し状況（北から）	3
図7	1区遺構実測図（1：20）	5
図8	2-1区遺構実測図（1：80）	6
図9	2-2区遺構実測図（1：40）	7
図10	3区遺構実測図（1：20）	8
図11	4-1区遺構実測図（1：40）	8
図12	4-2区遺構実測図（1：40）	9
図13	5区遺構実測図（1：50）	9
図14	6区遺構実測図（1：100）	10
図15	7区遺構実測図（1：40）	11
図16	8区遺構実測図（1：50）	12
図17	出土遺物拓影・実測図（1：4）	15

表 目 次

表1	遺構概要表	7
表2	遺物概要表	14

名勝 清風荘庭園

1. 調査経過

調査地は、京都市左京区田中関田町に所在する清風荘庭園内である。清風荘庭園は昭和 26 年に国の名勝に指定され、現在は国立大学法人京都大学（以下「京都大学」という。）が維持・管理している。

この庭園を整備する計画があり、整備に先立って、庭園の裏側にあたる旧南池を含む庭園南東部を確認調査することになった。なお、漏水のある北側の上池は、2007 年度に確認調査を行っている。調査は、名勝清風荘庭園整備活用委員会（以下、「委員会」という。）の指導の下、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が担当した。

なお、清風荘庭園内には複数の池や築山が存在する。現在表側園池については中央の土橋を挟んで北側を上池、南側を下池と呼びならわされている。その池の施設には特別に名称がないため、今回は以下の仮称を付して報告の便を図った。

魚溜りー上池中央部の窪み（8 区）

築山ー庭園中央部を南北に貫く築山、2 箇所ある狭隘部を境に北側を「北築山」、中央部を「西築山」、南側を「南築山」「南築山西部」とする。

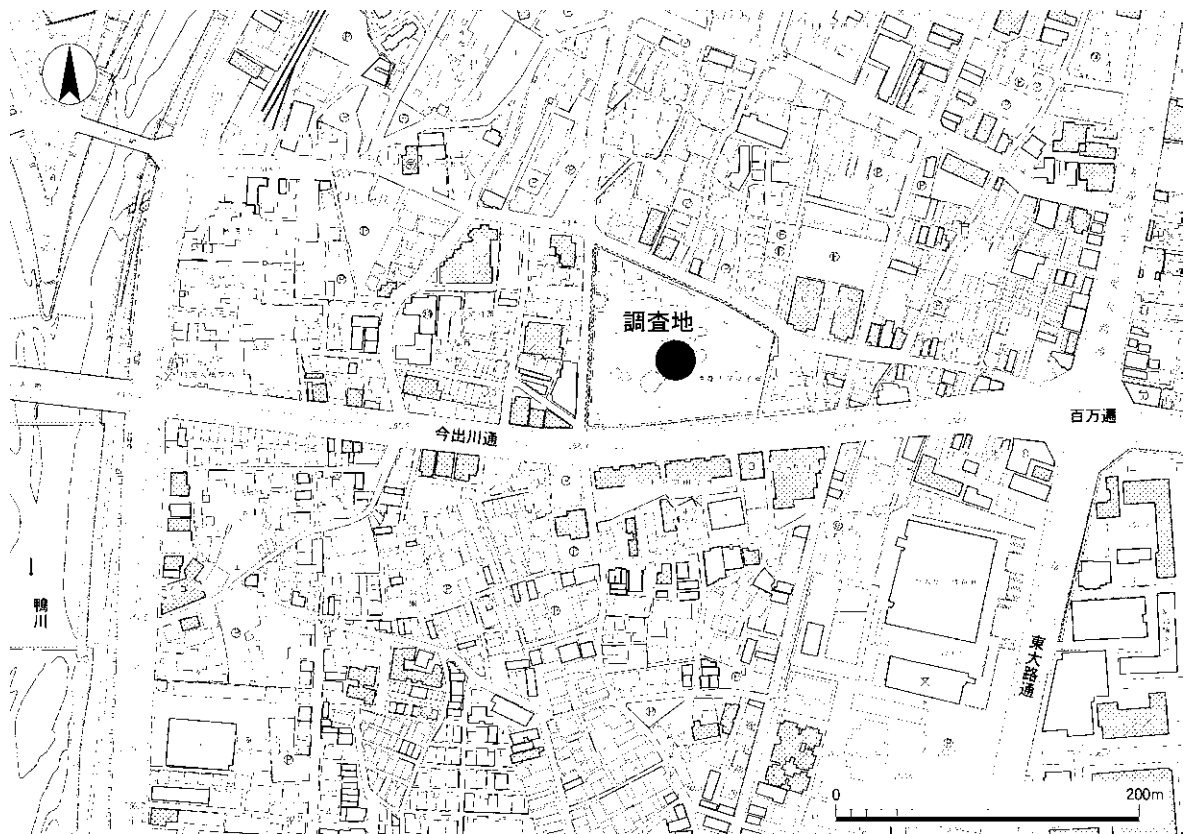


図1 調査位置図（1：5,000）

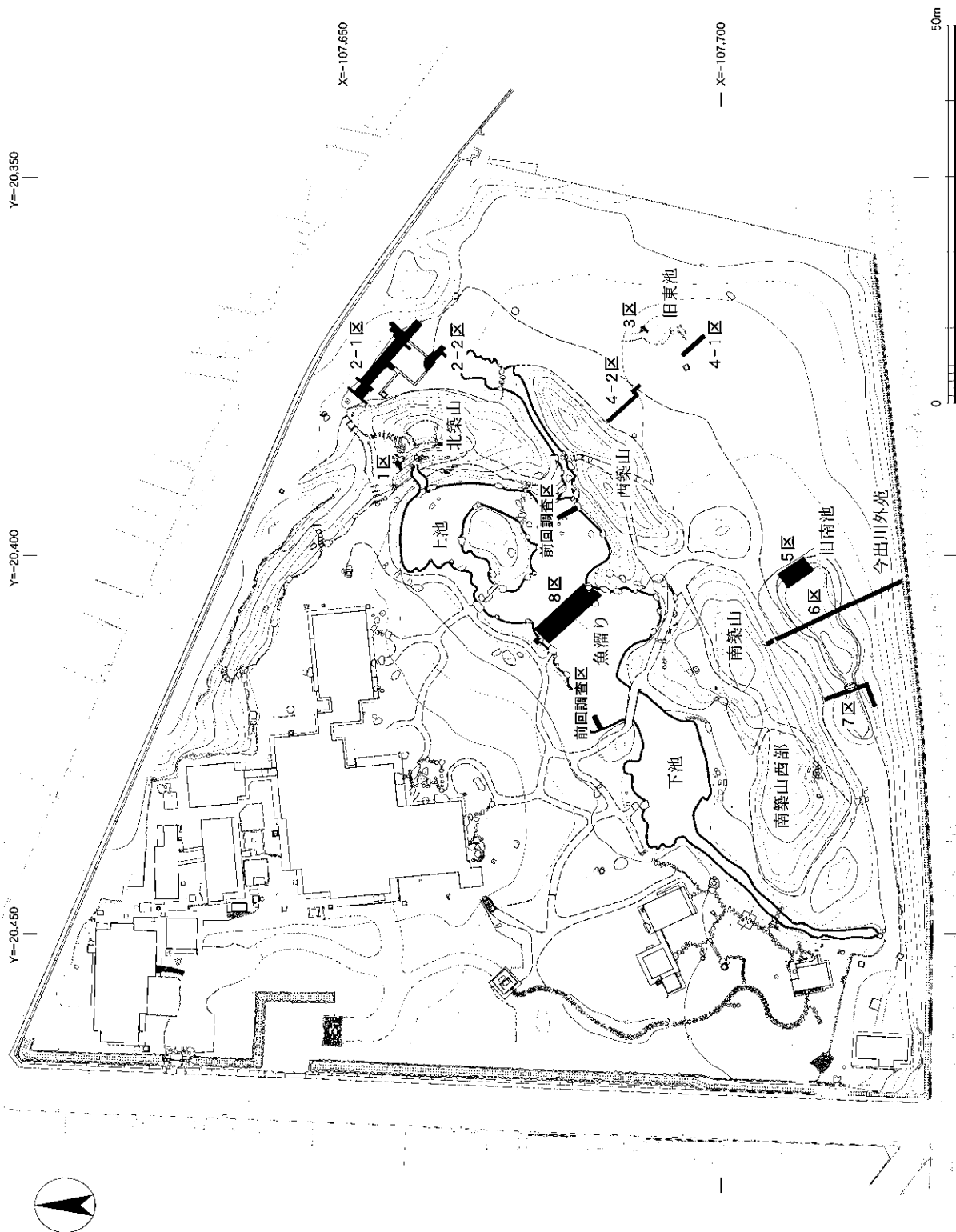


図2 調査区配置図 (1 : 800)



図3 2区調査前全景（南東から）



図4 5区調査前全景（南西から）



図5 2区作業風景（南東から）



図6 6区埋戻し状況（北から）

旧東池－庭園東側に位置する半埋没状態の池（3区）

旧南池－庭園南部に位置する半埋没状態の池（5～7区）

水槽－庭園北部に位置するモルタル塗りの構築物（2区）

今出川外苑－今出川通沿いの盛り上がり（6区）

調査は、2009年2月から機材の搬入などを行い、調査区を目的に応じて7箇所（1～7区）を設定し、上池にある魚溜りは8区とし、開始した。掘削はすべて人力で行い、排土は委員会の指導で敷地東側の窪地に仮置きした。先に2区の排土を入れ平らにならし、その上にそれぞれ調査区ごとに排土を袋に入れて積み上げた。調査においては委員会による立会いが3回行われ、調査区の成果報告をした後、拡張や断割の指示を受け、補足調査などを実施した。最終報告をし、調査を終了した。

埋戻しは、今後の整備を考えて一部はコンパネと踏み板を被せて保護し、その他の調査区は土嚢で埋め戻した。

3月18日（水）には調査成果を発表するため、現地公開を行い、210名の参加者を得た。

なお、調査区の設定には京都大学所有住友家資料の一部である昭和5年の絵図を参考にした。

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

清風荘は、享保 17 年（1732）に徳大寺家の別邸として、愛宕郡田中村に建てられたもので、当初は「清風館」と呼ばれていた。この地は、鎌倉時代に西園寺公経によって営まれた吉田泉殿の北辺部にあたると思われる。泉殿では公卿殿上人による競馬や連歌の会などが催され、遊樂の地であったが、江戸時代にはほとんどその面影を失っていた。

清風館は徳大寺家公望（後の西園寺公望）の生誕の邸として知られ、後、実弟の住友友純（後の住友吉左衛門）が譲り受けた。友純は明治時代末期から大正時代にかけて建物や庭園の大改造を行い、清風荘と称して公望の京都別邸として提供した。公望の没後は住友家によって保管されていたが、その後、京都大学に寄贈されたものである。敷地の北西には江戸時代末期の茶室や大正期に建てられた主屋をはじめとする建物群があり、南東部には明治・大正時代にわたって活躍した作庭家七代目小川治兵衛による琵琶湖を模した池や築山を配する庭園が広がり、その水は旧太田川から引いて利用していたが、現在は暗渠となったため取水できなくなり、井戸からポンプで汲み上げている。

(2) 既往の調査

2007 年度に上・下池の漏水の修理に先だって確認調査が実施された。調査では、池底から護岸石にモルタルが貼られている箇所と魚溜りに調査区を 4 箇所設定し、魚溜り部分も幅 0.3 m の断割を実施した。これらの調査で、池は当初の基盤層である砂礫層の上面に厚さ 0.1 ～ 0.3 m の入れ土を施し底面とする時期と、補修後の入れ土の上面に粘土を貼り付けて下地とし、その上にモルタルを塗り上げる時期の 2 時期あること、魚溜りは石積みの縦面に粘土を貼り付けその上に塗った漆喰が遺存する時期と、池底と同じく補修の際に漆喰を保護するため、漆喰の上面に粘土を貼りモルタルを塗って形成した時期の 2 時期あることが判明した。本調査では、魚溜りの全面改修に伴い、前回の調査を踏まえてさらに詳しく造成過程を調査するものである。

3. 遺 構

層序は調査区で異なるので、調査区ごとに以下に報告する。

1区：0.5㎡（図7、図版1）

北築山から上池に注ぐ滝口の給水管の状況を確認するため、北築山上に北東-南西方向に長さ約1.2m、幅0.3～0.5mの調査区を設定した。腐植土を含む堆積土の厚さが30cmあり、その下が築山の基盤層となる。標高は高い部分で55.13mある。地表下65cmで給水用の土管を検出し、滝口から北方向に延長していることを確認した。検出土管上部の標高は54.69m、滝口の土管上部の標高は54.63mで、滝口のほうが6cm低くなる。

2-1区：15.8㎡（図8、図版1）

建物基礎と推定される構築物の性格と昭和5年の絵図に描かれた流路を確認するために、構築物の壁沿いに長さ約13.6m、幅1mの調査区を設定した。構築物は、レンガを巻いたモルタルが幅35～25cmで、建物基礎状に地表に現れているもので、平面形は内矩で約3.0m×1.4m、1.4m×7.8m、2.7m×3.6m、5.4m×3.6mの大小の方形に区画されておりアール状の構築物が付く箇所もある。部分的に壊れているところもある。調査の結果、構築物については、深さ約1.2mでモルタル張りの床面を検出したこと、壁面から土管や導水施設を検出したことにより、建物基礎ではなく水槽であることが判明した。水槽は土や礫、バラスで埋められている。調査区南東部では石組の溝状遺構を検出したが、流路は確認できなかった。これらを踏まえて、石組溝の状況を確認するために水槽壁際に沿って北東に長さ2.2m、幅1mの拡張区（2.2㎡）を設定した。

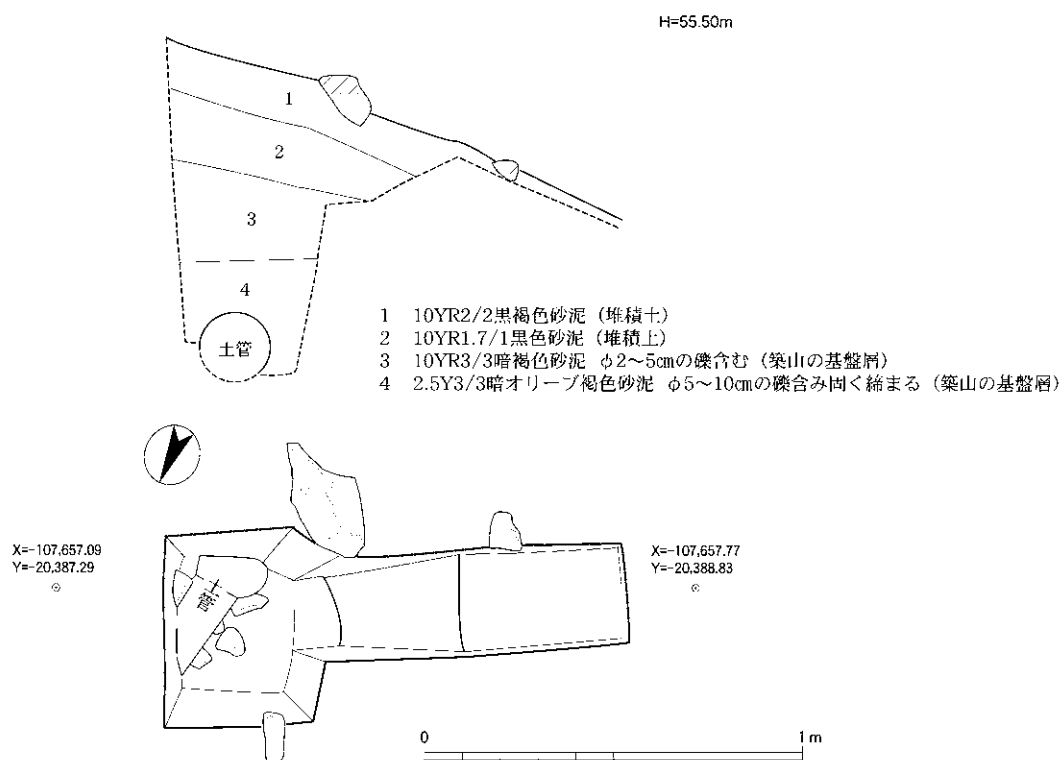


図7 1区遺構実測図（1：20）

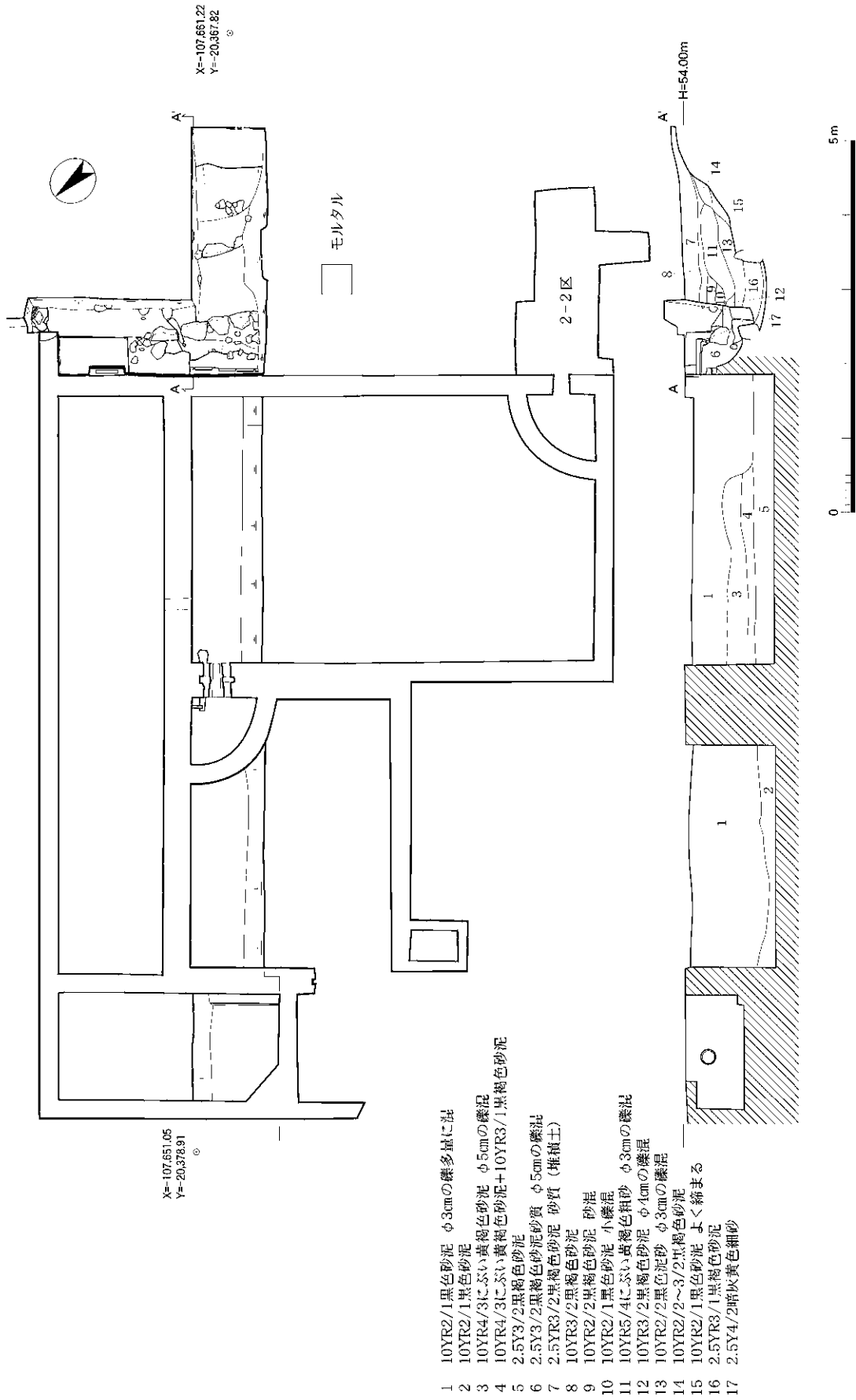


図8 2-1区遺構実測図 (1:80)

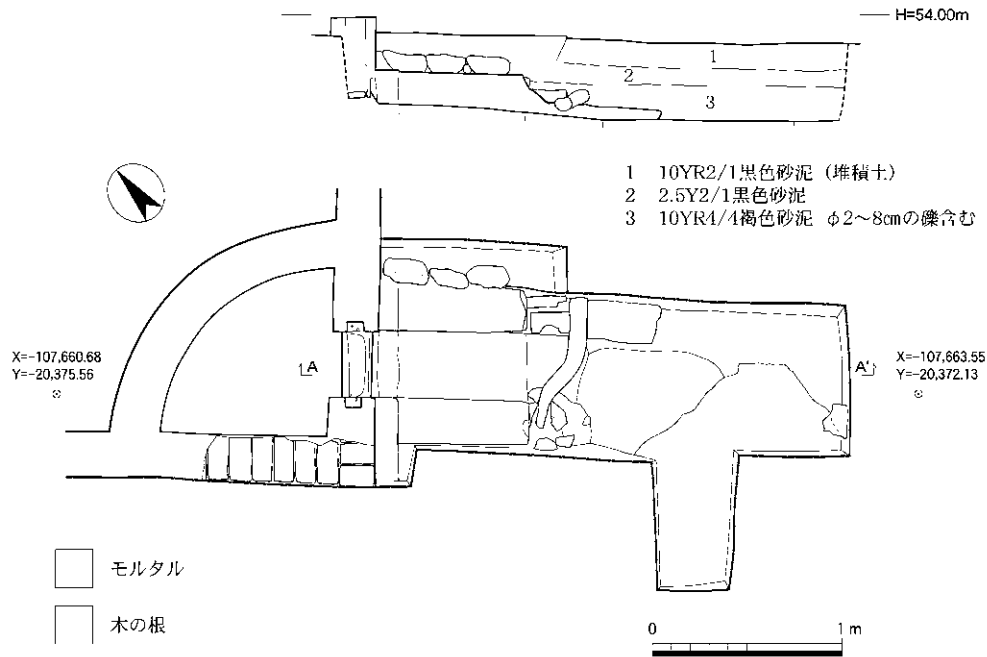


図9 2-2区遺構実測図(1:40)

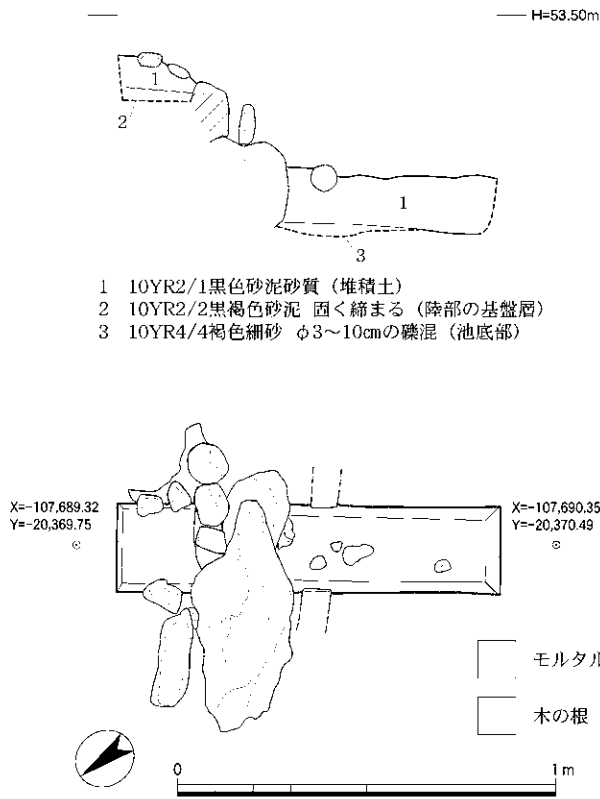
その結果、水槽に取り付く南北方向の流路の一部を検出した。検出規模は長さ1.7 m以上、幅0.4 m以上あり、南で攪乱を受ける。肩は石を巻き込んだモルタルで形成されており、モルタルの底部は標高53.47 mで、検出部分の北から1.2 mあたりで10 cmほど盛り上がり、また、南西に低くなる。取水口から取り入れた水がここでオーバーフローして南西方向に流れ、現池に注ぐものと考えられる。

2-2区：2.8 m² (図9、図版1)

水槽の流出口を確認するため、水槽壁際に沿って南東部に北西-南東方向に長さ2.8 m、幅1.0 mの調査区を設定し2-2区とした。腐植土を含む堆積土の厚さが15 cmあり、その下で流出口の壁際から水路を検出した。水路の壁は煉瓦にモルタルを被せたもので長さ1.4 mあり、それより南東は攪乱をうけて壁はない。北東側にある壁には径約20 cmの礫が3石並ぶ。水路の幅は0.35 mある。底部は水槽流出口から高低差7 cmの傾斜をもち、南東から南西に曲がり現池に注ぐと考えられるが、北東側の底が壊されているため、流路に続くものかは不明である。水路を南西方向に少し拡張したが、絵図に描かれていた橋の痕跡は確認できなかった。

表1 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代～明治時代	井戸	
明治時代以降	魚溜り、流路、水槽、園池・園路・築山の基盤層	



- 1 10YR2/1黒色砂泥砂質（堆積土）
- 2 10YR2/2黒褐色砂泥 固く締まる（陸部の基盤層）
- 3 10YR4/4褐色細砂 φ3~10cmの礫混（池底部）

図10 3区遺構実測図（1：20）

3区：0.2 m²（図10、図版2）

敷地南東の堆積土下から検出された旧東池の岸にあたる部分である。モルタル杭とそれを覆うモルタルが作業工程の差か、あるいは後の補修によるものかを確認するために、北東-南西方向に長さ1 m、幅0.2 mの調査区を設定した。岸側は堆積土が厚さ20 cmあり、その下に陸部の基盤層を検出した。標高は53.30 mである。護岸の石を固定するモルタルと杭の材質は似ており、かなり脆い。それと比較すると岸を覆うモルタルは硬質であり、質が違うものであることがわかる。このことからモルタル杭を覆うモルタルは後の補修であり、時期差があることが判明した。また、護岸石の標高が53.16 mあり、池の水位の標高はおよそ53.10 mとなる。

池底部は、地表下25 cm（標高52.95 m）で褐色の砂を検出した。

4-1区：2.4 m²（図11、図版2）

旧東池の底にある排水管が南西にある集水マスに繋がるか否かを確認するために、北西-南東方向に長さ4 m、幅0.6 mの調査区を設定した。腐植土を含む堆積土の厚さが15~20 cmあり、その下が陸部の基盤層となる。標高は53.30 mである。排水管の土管上部は地表下55 cmで検出し、集水マスにつながることを確認した。

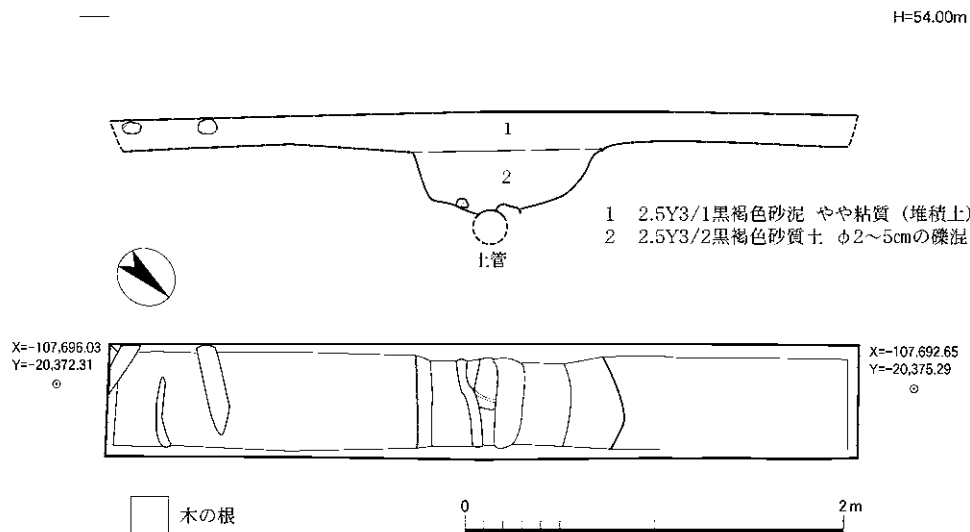
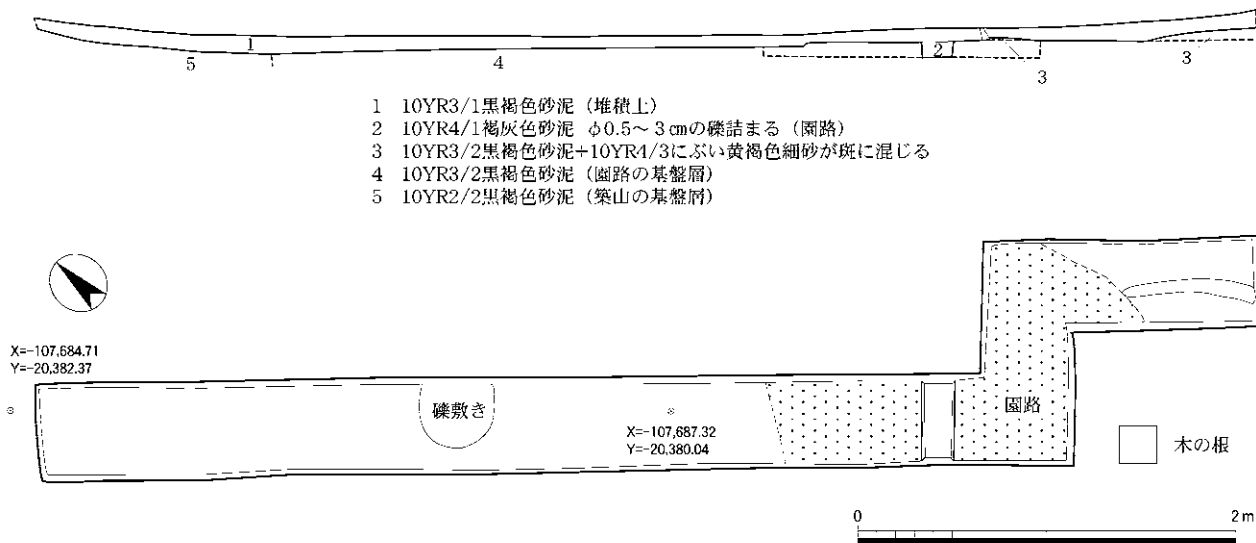


図11 4-1区遺構実測図（1：40）

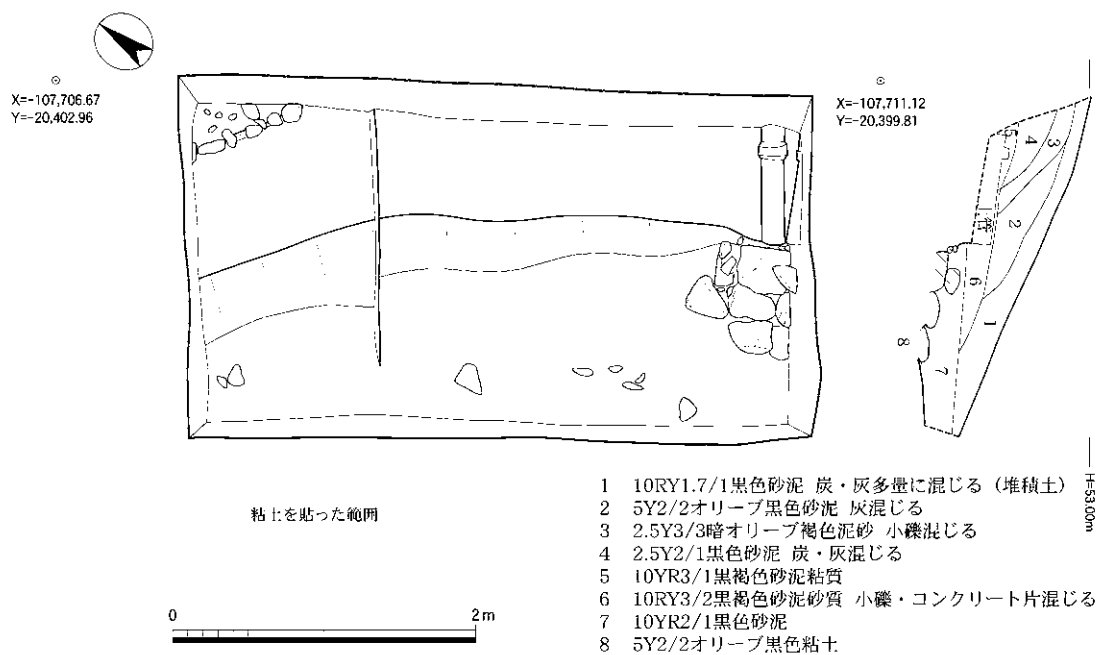


- 1 10YR3/1黒褐色砂泥 (堆積土)
- 2 10YR4/1褐色砂泥 φ0.5～3 cmの礫詰まる (園路)
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥+10YR4/3にぶい黄褐色細砂が斑に混じる
- 4 10YR3/2黒褐色砂泥 (園路の基盤層)
- 5 10YR2/2黒褐色砂泥 (築山の基盤層)

図12 4-2区遺構実測図 (1:40)

4-2区: 4.0㎡ (図12、図版2)

西築山東側の園路の範囲を確認するため、4-1区の延長上に北西に長さ6.5m、幅0.5mの調査区を設定し、4-2区とした。堆積土は約5～10cmあり、その下で路面と考えられる小礫敷きを検出した。礫敷きの標高は53.40mである。礫敷きは断割により10cmの厚さがあることを確認した。園路の北西では西築山の基盤層を検出し、南東では整地土が築山状に盛り上がることを確認した。



- 1 10RY1.7/1黒色砂泥 炭・灰多量に混じる (堆積土)
- 2 5Y2/2オリーブ黒色砂泥 灰混じる
- 3 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂 小礫混じる
- 4 2.5Y2/1黒色砂泥 炭・灰混じる
- 5 10YR3/1黒褐色砂泥粘質
- 6 10RY3/2黒褐色砂泥砂質 小礫・コンクリート片混じる
- 7 10YR2/1黒色砂泥
- 8 5Y2/2オリーブ黒色粘土

図13 5区遺構実測図 (1:50)

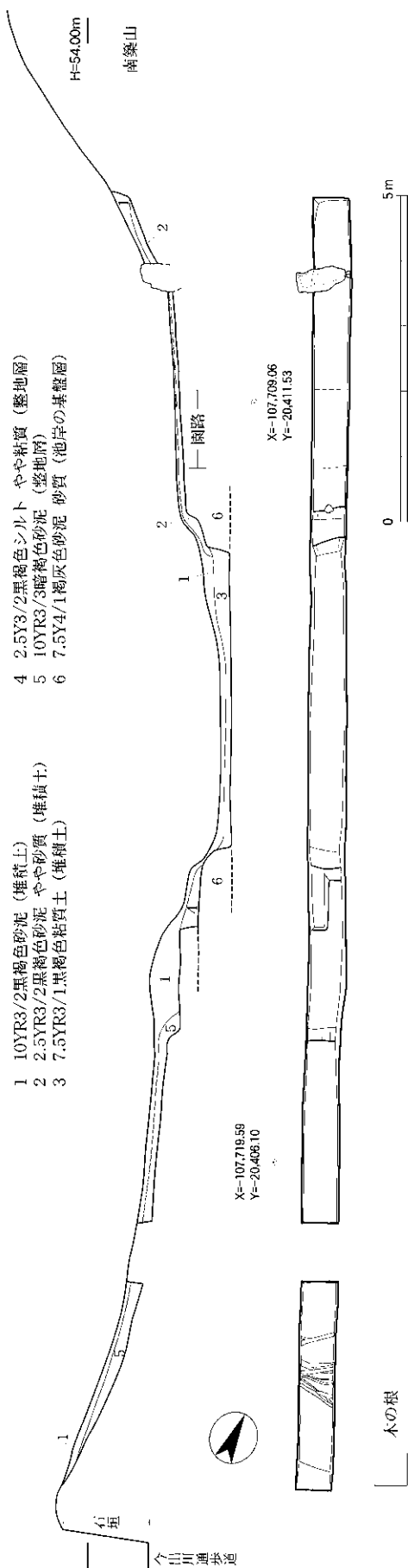


図14 6区遺構実測図 (1:100)

5区：10.5㎡ (図13、図版2)

旧南池の取水口検出と池岸の状況を確認するため、南北方向に長さ4.2m、幅2.5mの調査区を設定した。上層の腐植土を含む堆積土は、ほとんどが炭と灰からなり、厚さは40～45cmある。この土層の除去後、調査区南端で土管および水受けと考えられる石を検出した。水受けの石の周辺には粘土が貼り付けられていた。池底の標高は51.85mである。また調査区の北側を断ち割って池岸の基盤層と陸部で石列を検出した。陸部の標高は52.60m、池岸の標高は52.25mである。なお、護岸の石は検出できなかった。

6区：12㎡ (図14、図版3)

今出川通側(今出川外苑)から南築山にかけて、築山と旧南池の関係を確認するために、長さ約20m、幅0.6mの調査区を設定した。調査の結果、腐植土を含む10～20cmの下で、池岸・池底・園路・築山の基盤層を検出した。池南側は廃棄された炭・灰が堆積し、部分的に厚さ50cmにもなる。また、南岸を断ち割った結果、その下に厚さ50cm程の盛土を施して勾配をつけていることを確認した。盛土下面が池岸の基盤層となる。南岸の標高は52.26m、池底の標高は51.82m、北岸の標高は52.20mである。北岸からやや高くなり小礫が混じった園路となる。園路の幅は1.2mで、標高は52.54～52.64mあり、北に10cm高くなる。そのまま景石まで緩やかな勾配をつけ、景石から北は急な勾配となる。ちなみに今出川通の歩道の標高は53.08m、今出川外苑の上端の標高は54.50m、南築山の頂上の標高は55.22mである。

7区：5.8㎡ (図15、図版3)

石橋部分の調査で、池岸および取水口の確認のため南北方向に長さ約6.4m、幅0.6m、東西方向に長さ約3.0m、幅0.6mのL字形の調査区を設定した。調査の結果、岸と護岸石を検出したが、取水口は確認できなかった。岸部分を断ち割り、池岸の基盤層を検出した。南北の池岸と池底の標高は、それぞれ52.10m、

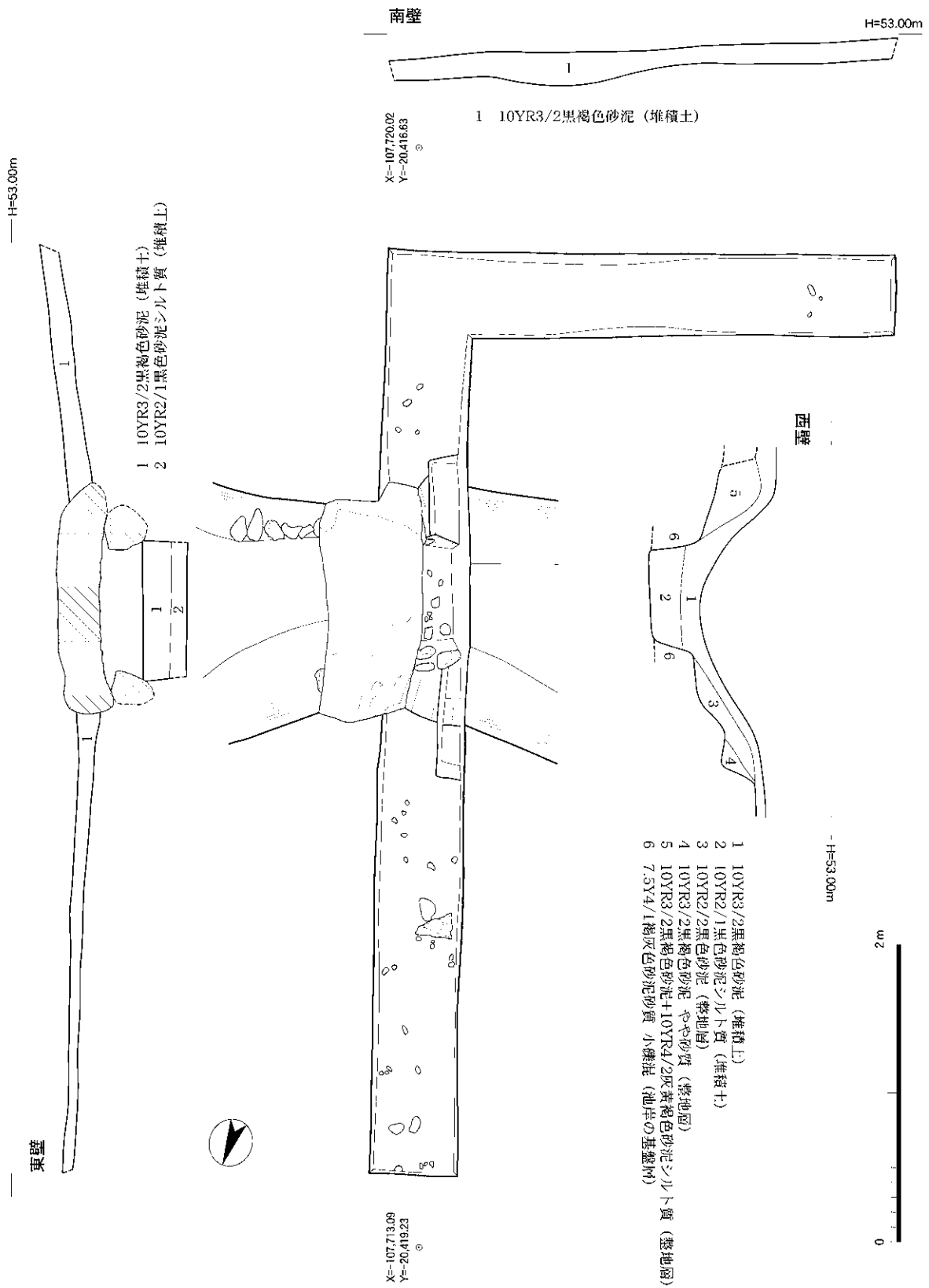
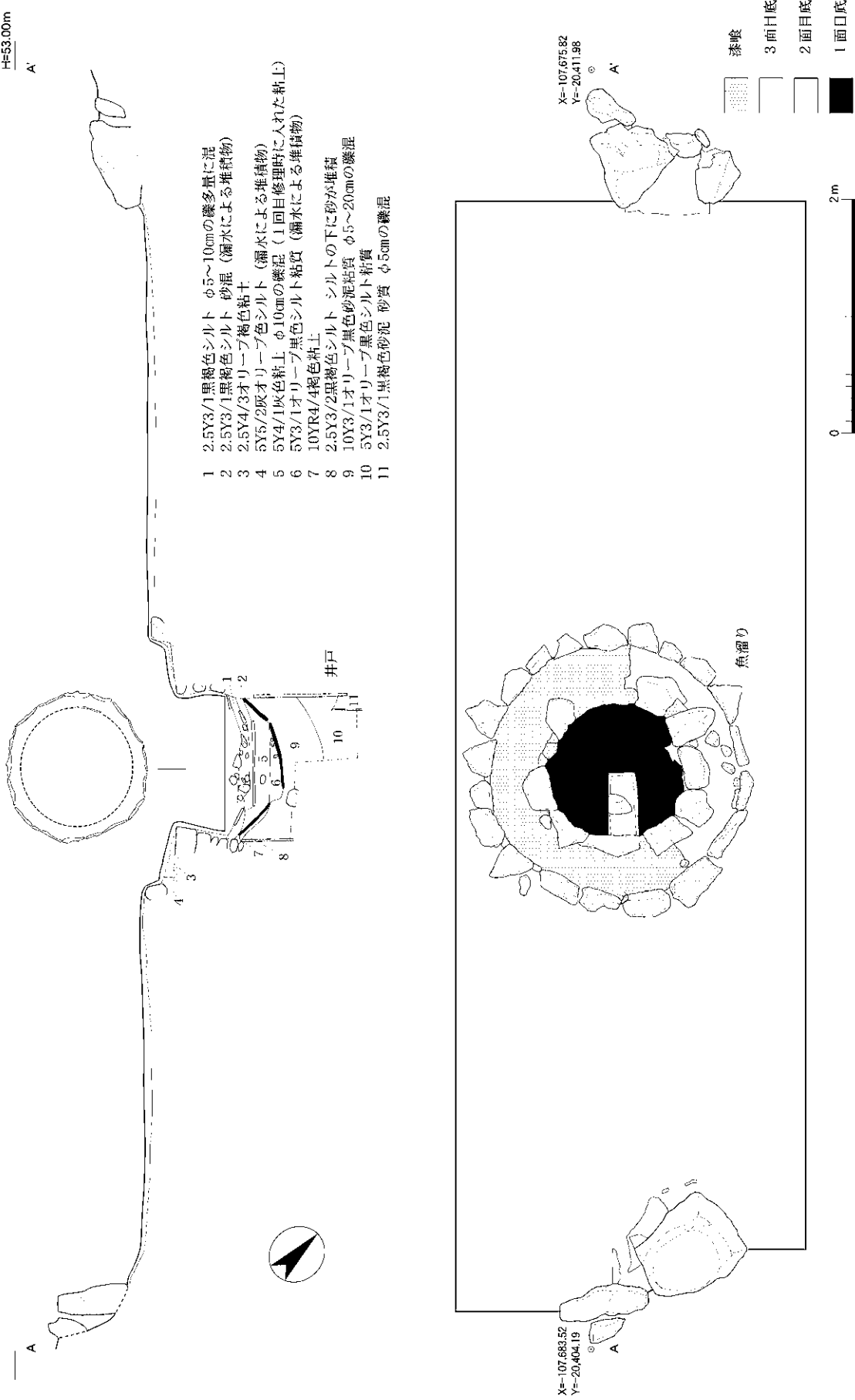


図15 7区遺構実測図 (1:40)

H=53.00m



- 1 2.5Y3/1黒褐色シルト φ5~10cmの礫多量に混
- 2 2.5Y3/1黒褐色シルト 砂混 (漏水による堆積物)
- 3 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土
- 4 5Y5/2灰オリーブ色シルト (漏水による堆積物)
- 5 5Y4/1灰色粘土 φ10cmの礫混 (1回目修理時に入れた粘土)
- 6 5Y3/1オリーブ黒色シルト粘質 (漏水による堆積物)
- 7 10YR4/4褐色粘土
- 8 2.5Y3/2黒褐色シルト シルトの下に砂が堆積
- 9 10Y3/1オリーブ黒色砂泥粘質 φ5~20cmの礫混
- 10 5Y3/1オリーブ黒色シルト粘質
- 11 2.5Y3/1黒褐色砂泥 砂質 φ5cmの礫混

図 16 8区遺構実測図 (1:50)

52.08 m、51.80 mである。旧南池の水位は、5～7区の調査の結果、標高およそ52.00 mに復元できる。石橋は、旧池岸の上に25 cm程盛土をしてその上に架けられたもので、後に付加されたものであることが判明した。また、池の北側に園路の基盤層を検出した。標高は52.50 mである。

8区：30 m²（図16、図版4）

上池にある前回確認調査を実施した魚溜り部分について修復工事に立ち会い、調査を行った。まず池底から魚溜りに続く断面を観察・図化するためモルタルを切断した。池底のモルタル直下は空隙となる部分が多く、その下は漏水のため泥土が溜まっている。魚溜りは石を積み上げて基礎とし、壁面に粘土を貼り付け、上部とともに漆喰で固めてある。底は漆喰モルタルで作る。その底が下に沈み込んで割れたため、上部に粘土を貼り付け、天場から底までモルタルで1回目の修復が行われている。そのモルタルの底が再び割れて沈み込んだため、2回目の修復として5～15 cm程の礫を詰め、底部だけコンクリートを厚く施している。このように魚溜りは大きく2回修復されていることが確認できた。また、当初の魚溜り底の漆喰モルタルを一部取り除き断割を実施したところ、石組下から縦板を検出した。このため下層を調査することになり、漆喰モルタルをすべて除去し掘り下げたところ、幅15～20 cm・厚さ1.5～2.0 cm・長さ80 cm以上ある縦板が、直径約1.2 mの円形で全周に巡り、さらに内側下部に一回り径の小さい円形縦板組みが存在することが明らかとなった。外縦板と内縦板の間は10 cmあり、固く締まった砂質土が入る。底は検出面から60 cm以上あり、未検出である。これらのことから、この魚溜りは円形縦板組みの井戸を埋め立てて作ったものと判明した。

4. 遺 物

(1) 遺物の概要

出土遺物は整理箱で2箱である。各調査区から出土し、中世から現代までの遺物がある。中世では鎌倉時代の土師器や瓦器が8区の井戸から、輸入陶磁の白磁が5区から埋土に混入して出土している。ほとんどが細片で、図示できるものは1点しかない。江戸時代から現代の遺物では陶磁器が大半を占め、他に土師器や土製品などがある。土器以外では瓦、石製品、鉄製品などが数点ある。ここでは江戸時代から明治時代の遺物を中心に図示できたものを記述する。また、別に魚溜り構造材（モルタルおよびコンクリート）をサンプルとして抽出した。

(2) 出土遺物（図17、図版5）

土器類 各調査区から土師器、国産施釉陶器、磁器、土製品などが出土した。土師器には粗製皿Nr(1)がある。口径6.0cm、高さ1.1cmで、江戸時代後期に属する。5区から出土した。国産施釉陶器には灯明皿受(2~5)、急須蓋(6)、土瓶蓋(7)、鍋蓋(8)、椀(9・10)、甕(11)、壺(12)、小壺(13)がある。灯明皿受は、2から5の順に口径6.0cm・高さ1.1cm、口径8.0cm・高さ1.8cm、口径10.6cm・高さ1.8cm、口径10.8cmである。2・5は7区、3・4は2-1区から出土した。急須蓋は口径5.7cmで、蓋上面には鉄釉の上からいっちんを放射状にたらし。摘みは欠損している。6区から出土した。土瓶蓋は口径9.4cm、高さ2.8cmで、蓋上面に白梅を描き、摘みは亀を表す。2-1区から出土した。鍋蓋は口径16.9cmで、上部が欠損する。端部以外の内外面に鉄釉を施す。6区から出土した。椀(9)は腰の張るタイプで高台が付く。上部は欠損する。体部外面はケズリ調整を施し、体部内外面に釉を掛ける。6区から出土した。10は三島手の椀で、口径11.2cmである。体部内面に花や渦巻き文を型で押し白泥を塗布し釉を施す。産地は不明で、2-1区流路跡から出土した。甕は口径13.0cm、高さ11.4cmで、口縁端部上面と底部外面は露胎である。体部外面に3箇所褐釉をたらし、内外面に灰釉を施釉する。蓋が付くタイプである。2-1区流路跡から出土した。12は鉄釉を施した壺口縁部の小片である。7区から出土した。13は

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
鎌倉時代	土師器、瓦器、輸入磁器		輸入白磁1点		
江戸時代 ～幕末	土師器、施釉陶器、土製品、瓦		土師器1点、施釉陶器8点、土製品2点、棟丸瓦1点、軒平瓦1点		
明治時代以降	施釉陶器、磁器、ガラス製品、		施釉陶器4点、染付磁器1点		
時期不明	石製品、鉄製品		石製品1点、鉄製品1点		
合計		2箱	21点(1箱)	1箱	0箱

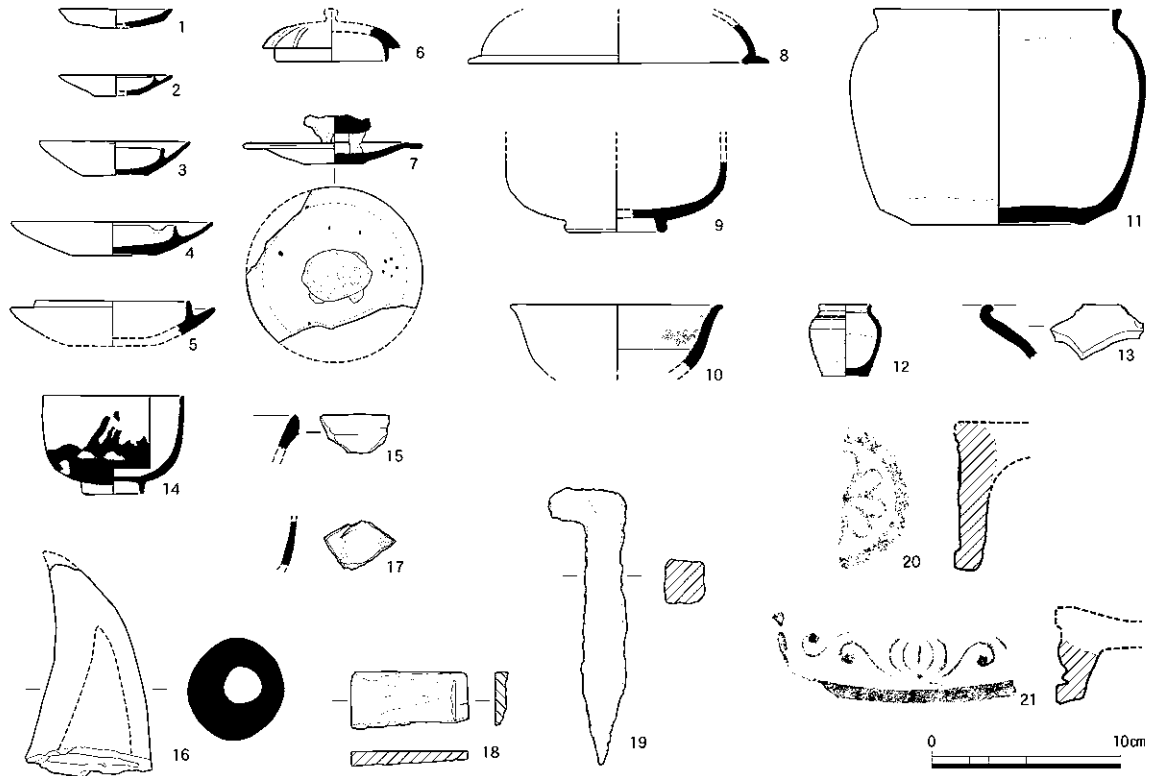


図 17 出土遺物拓影・実測図（1：4）

口径 2.8 cm、高さ 3.8 cm で、かなり小さい。外面に櫛目で多数の条線を付け、内外面に鉄釉を施す。5 区から出土した。施釉陶器 2～9 は京都産で江戸時代後期から幕末に属する。その他は明治時代から現代に属する。磁器には染付椀（14）がある。口径 7.4 cm、高さ 5.2 cm で、外面に富士山を描く。産地は不明で明治時代から現代に属する。2-1 区流路跡から出土した。土製品には焙烙（15）、不明製品（16）がある。15 は口縁部の小片で、6 区から出土した。16 は器種は不明であるが、角形中空で裾部に接着の様子がみられることから土人形牛の角の可能性はある。2-1 区流路跡から出土した。ともに江戸時代後期から明治時代に属する。輸入陶磁器では白磁の小片（17）がある。器種は不明で、体部内面に櫛描文を描く。5 区から出土しており、鎌倉時代に属する。

石製品 18 は硯で、平面形は方形を表す。表裏とも剥離しており、3/4 が欠損している。周縁部上面に直線の線彫りが残るが、陸部か海部か不明である。7 区堆積土から出土した。時期は不明である。

鉄製品 19 は鉄製の鑿である。長さ 14.6 cm、厚さ 2.2 cm で、頭部は L 字に曲がる。断面は方形を呈し、先端は細く尖る。7 区整地層上から出土した。時期は不明である。

瓦 瓦には棟丸瓦（20）、軒平瓦（21）がある。棟丸瓦は菊花文単弁 8 弁で、中心部が盛り上がる。瓦当部裏面上部にカキメをつける。2-1 区流路跡から出土した。軒平瓦は瓦当文の中心飾りに 5 葉の子葉があり、両側に唐草が 2 回反転する。5 区から出土した。棟丸瓦は初見は江戸時代前期から中期、軒平瓦は江戸時代後期にある。

5. ま と め

清風荘庭園の築山背面にあたる部分について、今回の確認調査を実施した結果、埋没した池や園路などの状態を明らかにすることができた。また、庭の北東部に存在する不明構築物が水槽であったこと、現池の魚溜りの修復工程が判明したことや、これが元井戸を利用したものであったことがわかった。井戸が機能していた時期には池が存在していなかったと考えられ、作庭の時期を具体的に示す資料として注目できる。また、庭園の築山背面は長年にわたり放置されており、全体に腐葉土などの自然堆積土が10～20cmの厚さで堆積していた。遺構や基盤層などはその下面で検出したものである。

以下、調査区ごとの成果を述べる。1区・4区では導水管の検出によって給排水のシステムの一部を確認できた。2-1区では水槽とともに、絵図に描かれていた流路を検出できた。2-2区では水の流出口を検出し、水路は上池に注ぐ方向に造られていたことが判明した。しかし、絵図ではこの付近にあったとされる橋は確認できず、2-1区で検出した池と水路がつながるものかは不明である。旧南池の調査では、5区の南壁際から検出した2本の導水管は、1本は北東向き、もう1本はやや南寄りに設置されている。3区旧東池（復元水位は標高およそ53.10m）から排水された水は集水マスを通して、北東向きの導水管から旧南池に注いだものと考えられる。また、5～7区で検出した池岸の標高（52.25m・52.20m・52.08m）から、池の水位はおよそ52.00mと復元できる。池底は51.85m・51.82m・51.80mと西方向に低くなることから、池の水は西に流れて池尻に据えられている排水管から敷地外に排出されたことがわかる。今出川外苑は、昭和5年以降に今出川通が拡幅された後、石垣を設置し、盛土を施して築山状に造られる。これらのことから旧南池が機能していた頃の地形から現在の地形に至る変遷が判明した。ちなみに石垣の上端の標高は54.40m、現在の今出川通北側歩道の標高は53.08mである。

また、明治時代末から大正時代初頭に七代目小川治兵衛によって作庭された現池は、敷地の北側に流れる旧太田川から取水していたものとされる。太田川は江戸時代に農業用水として高野川流域（現在の三宅橋下流辺り）に設けられた太田井堰から引かれた川で、高野・修学院・一乗寺・田中を灌漑して鴨川に注いでいたが、昭和30年頃に暗渠となって取水ができなくなり、井戸水をポンプアップして上池に流している。次に、水槽が作られた時期は不明であるが、やはり太田川からの取水ができる時期に活用していたものと考えられる。最後に築山背面には集水マスが数箇所あり、そのマスから導水管が多方に延びるが、その方向は不明なものが多く、これらも太田川から取水のできなくなって廃棄されたものであろう。

参考文献

『史料 京都の歴史 第8巻 左京区』株式会社平凡社 1985年

『京都市の地名』日本歴史地名大系第二七巻 株式会社平凡社 1979年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	めいしょう せいふうそうていえん							
書名	名勝 清風荘庭園							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2008-23							
編著者名	田中利津子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2009年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
めいしょう 名勝 せいふうそうていえん 清風荘庭園	きょうとしびきょうく 京都市左京区 たなかたけまでんちょう 田中関出町	26100	A313	35度 01分 45秒	135度 46分 35秒	2009年2月 26日～2009 年3月31日	84.0㎡	庭園整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
名勝 清風荘庭園	名勝	鎌倉時代			土師器、瓦器、輸入磁器			
		江戸時代 ～明治時代	井戸		土師器、施釉陶器、土製品、瓦			
		明治時代以降	魚溜り、流路、水槽、園池・園路・築山の基盤層		施釉陶器、磁器、ガラス製品			

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-23

名勝 清風荘庭園

発行日 2009年3月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1

〒 602-8435 TEL 075-415-0521

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地

〒 604-0093 TEL 075-256-0961